



【私の主。私の神。】

今日の聖書本文:ヨハネの福音書20章24-31節/暗唱聖句;ヨハネの福音書20章29節

説教者:牧師 鄭南哲

愛するクリスチャンプレイズの信仰の家族のみなさん！今週主の受難週間を敬虔に過ごせましたか。今日はイエス様の復活を記念し、感謝をささげるイースター礼拝です。十字架の死からよみがえられ、天にのぼって今日も我々ためにとりなしてくださるインマヌエルの主イエスキリストの恵みと勝利がクリスチャンプレイズチャーチの教会の家族の上に豊かに豊かに満ち溢れますよう切にお祈り申し上げます。

<トマスという弟子>

今日の本文はイエス様の弟子の一人であるトマスがイエス様の復活を信じずにいましたが、結局復活された主に出会ったからようやく‘私の主、私の神’と告白する内容です。そういうわけで人々はかならず‘疑い深いトマス’といいますが、実際トマスのあだ名は‘デドモ’でした。つまり双子という意味です。最近双子がめずらしくないですが、むかしはまれだったようです。おそらく一卵性の双子だったのではないかと思います。しかし、彼が双子だったことに特徴があったわけではありません。彼は誰よりも現実主義者でした。トマスは目に見えたとしても自分の手で触って確認できなければ信じようとしませんでした。そういうわけで彼は‘疑い深いトマス’というあだ名がつけられましたが、結局はイエス様の弟子たちの中で一番最後にイエス様の復活を信じるようになりました。今日の本文の箇所はヨハネの福音書の結論です。使徒ヨハネがこの偉大な福音書の結論をトマスの話でまとめていることはとても不思議ですが、弟子であるトマスがイエス様の復活を最後まで疑ったことと、後に復活された主に出会ってその疑いが変わって信仰になる過程は我々にとっても大切な意味を教えて下さっています。

ヨハネの福音書20章19節からみると、最初弟子たちはイエス様の復活をだれも信じませんでした。しかし、安息日がすぎた夜、彼らがみな集った時、そこに復活されたイエス様が現されました。そこにいた弟子たちはイエス様に拝見してからイエス様の復活を信じるようになりました(20節)。しかし、そこにイエス様の弟子一人が抜けていました。その弟子が今日の本文に出ているトマスです。トマスは弟子たちに現れたイエス様の話を聞いても信じませんでした。(24-25節)。

まず、弟子たちがみな集った時、トマスがそこにいなかったことが大切です。主の十字架の前では散らされた弟子たちがなぜみなあつまっただでしょうか。その理由は主のお墓から起きたおどろく出来事を聞いたからです。ペテロともう一人の弟子はイエス様のお墓が空っぽになっていたことを確認したと言われます。マグダラマリヤはそのお墓の前でよみがえられた主に出会ったと言います。(ヨハネ20:11-18)これは弟子たちにはとても大切な出来事であって、この事実をもっとくわしく確認するためにそれぞれ隠れていたところに連絡合って集ったのです。しかし、そこにトマスは来ませんでした。トマスがそこにいなかったことに対して、単純に彼に連絡が届かなかったと考えてはいけません。トマスは弟子たちの話でさえ信じなかったのです。トマスが復活された主に出会った弟子たちに言った言葉や、主に言った言葉などを考えてみる時、彼に連絡が届かなかったため集りに来なかったわけではなく、イエス様の復活を信じなかったため来なかったことが分かります。

たとえば、イエス様がラザロを生き返らせるためにユダにふたたび入ろうとした時、トマスも登場します。イエス様はラザロが病気になったことを聞いてからもすぐユダに入らず、おられるところで二日も泊まられました。当時ユダヤ人とイエス様は仲があまりよくありませんでした。弟子たちはイエス様がユダにいかないのが、ユダヤ人たちのためかと思ってひそかに喜んでいました。しかし、ラザロが死んで、彼を生き返らせるために行かれるというイエス様の話を聞いてトマスは、“我々も行って、主といっしょに死のうではないか(ヨハネ11:16)”と言います。

つまり、トマスは死んだラザロを生き返らせるためにイエス様がふたたびユダに入るといことはむなく死を迎える事にすぎないと思っていたのです。ここでトマスには現実が大切であることが分かります。現実的にユダはとても危険なところであって、トマス自身は本当に行きたくありませんでした。ユダに行くことは死ぬために入るのと一緒だと判断したのです。しかし、それにもかかわらずイエス様がユダに行かれた時、トマスはイエス様を離れませんでした。これがトマスがイエス様の弟子になれた特徴でもあります。彼はとても現実的であって、気に入らない事ははっきりと気に入らないと言いましたが、それにしても主が行かれるならついて行きました。

イエス様の弟子であるトマスはイエス様を愛し、主から離れることを望みませんでした。反面、現実的であって、自分の考えから外れた事に対しては受け入れがたい性格をもっていたことが分かります。彼はすべてのことを確認し、検証したゆえに信じて従う、とても合理的な人であったと言えます。

<イエス様の復活を信じられない理由>

トマスを通してイエス様の復活を信じられなかった理由が何であるかを考えることができます。

一つ目は超自然的な世界に対する関心や思いが全然ないため復活を信じない場合です。一週間の間、ずっと考えていることがお金を稼ぐこととか、この世のものや人々の態度に関することなどなら、ある日、突然、主の復活に対する話を聞いた時、とんでもない話をするなど反応するしかないと思います。なぜなら、その人の頭には死んだ人の復活についてあらかじめ、入力されているソースがまったくないからです。死について考えたことがない人に復活についての話が耳に入るわけがありません。周りに愛する人が死を迎えたとか、近くの人が召される衝撃を受けてから人間の死について深刻になり、ようやく復活に対する話を聞き入れるようになるのです。ですから、その前は死と復活を自分とは関係ない遠い話として扱ってしまうので

す。

一方、自分の考えがあまりにも強いため受け入れられない場合もあります。特に思考が論理的で、合理的な考え方が強い人々がいます。その人たちは自分の論理と思いをやぶろうともしません。

たとえば、ある人は思考の中心が自分にあります。要するに自己中心的です。すべてを自己中心に考えます。その人は職場においても自分のやり方を通します。なにか悪い思いがあるからではありません。ただ、すべてのことを自己中心に考えるからです。ほかの人が自分の考えと違った行動を取ると裏切られたと感じ、心のかべを作ってしまう。その人はだれがどんな話しをしても自分の考えと違くと受け入れません。ある人々はまるで、自分の世界に閉じ込められている王のようです。これを心理学的にナルシズム(narcissism)と言います。自分の中に、ある世界を作って置いてその中で君臨し、その中ですべてを考えます。ところが、ある新しい事実が自分だけの世界を破ってくる時それが事実であろうとなかろうと拒否してしまいます。ほかの弟子たちが復活されたイエス様に出会ったと言った時トマスは何と言いますか。

“私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れて見なければ、決して信じません。”(25節)

いまほかの弟子たちがイエス様に出会ったという言葉をとマスはとんでもない話であり、それが事実であろうとそうでないであろうと信じまいということです。

その理由はなんですか。トマスの心はすでに主の死について自分の思いと整理がもうついたからです。

‘主はすでに死なれた。もうイエス様とはすべてが終わりだ。そして、いま私とは関係がない。’

トマスはいま変化を拒否しています。自分の世界を破ってそれより大きい事実を受け入れまいと拒んでいます。彼は続けて自分だけの世界にとどまりたがっていました。もし、彼のこのような態度のためイエス様が再び会って下さらなかったなら彼はどうなったのでしょうか。おそらくトマスはひどいナルシズムの被害者となっていたかもしれません。今日私たちにもある程度トマスのような傾向はないでしょうか。

ですから、愛するみなさん！ 神様の御言葉を聞く前にまず自分をかえりみる事がどれほど大切なのか分かりません。自分の心に神様の御言葉が入れる空間がなければなりません。ある思いに満ちている人にどんなに熱心に説明しても入るわけがないからです。

今トマスは二つのすべてに当てはまります。彼の頭にはイエス様の死と復活が入力されていませんでした。ただ、彼には肉体のイエス様だけが意味がありました。死なれたイエス様については全然入力されていませんでした。イエス様が十字架にかかって死なれると言われても彼は聞きませんでした。その理由は彼がそれをのぞまなかったからです。それだけではなくトマスの強い思いは彼をイエス様の復活を信じる一番遅れた人とさせました。トマスのことを考えてみる時、イエス様が実際に復活されましたが、その復活されたイエス様を自分の心に受け入れるのにどれだけ多くの障害物があるのかが分かります。

<期待に満ちた主日の夜>

もう一度本文に戻ってみましょう。イエス様に出会ってから一週間の間、弟子たちには何もありませんでした。イエス様は現れませんでした。イエス様に出会ってから八日にたったいまユダヤ人たちの祭りは終わりました。すべてのユダヤ人たちはそれぞれ自分たちの故郷に戻ります。なのに今日の本文を読むと、弟子たちはふたたび集りました(26節)。

なぜなら、‘もしかすると復活されたイエス様が今日も我々に会いに来てくださるかも知れない。’という期待が弟子たちにはあったようです。今回はトマスも一緒です。きっとトマスの強い疑いにもかかわらず他の弟子たちが強くすすめたからだと思います。ほかの弟子たちはトマスを今回こそ一人にさせませんでした。ほかの弟子たちには一つ強い期待と望みがありました。“主よ。先日は我々に来てくださいました。しかし、その時一人抜けていた弟子がいました。主よ。トマスは主の復活をまだ信じていません。我々の力ではなにもできません。主が再び来られて彼のすべての疑いを取り除き、彼にも我々のように復活の信仰をください。”そして主はその望み通りに彼らにたずねて来てくださいました(26節)。復活されたイエス様は以前と同じく来てくださいました。そして、不安と葛藤と緊張の中にいる弟子たちにはまず“平安があなたがたにあるように”と挨拶をしてくださいます。

イエス様が我々にたずねてくださるとき、そして生きておられるイエス様に出会う時、現される一番確実な現状は、我々の中にある葛藤と緊張と不安が消え去り、心は喜びと平安で満たされるということです。

今日弟子たちから学ばされる一つがあります。それは、イエス様の復活を信じているほかの弟子たちは疑っているトマス
を非難しなかったことです。彼をむりやり説得させようとしませんでした。彼らがやったことは一週間を待って再び集ったこと
です。ほかの弟子たちはイエス様の復活を信じないトマスを一人に取り残しませんでした。みなさんはイエス様の十字架と復活を信じますか。まだこの事実を信じないで、いや信じられないでいる人々もいます。私たちも弟子たちのようにイエス様が直接出会ってくださって彼らの不信を取り除いて、信仰の確信をくださるよう助け、その機会を作ってあげて、待たなければなりません。我々も過ちを減らさなければなりません。ある時は自分の力でなんとか頑張ります。今日我々にもこのような期待がありますようにお祈り申し上げます。何も考えずに、なんの期待もなく来てはいけません。すくなくとも我々のそばにいる兄弟姉妹のためにこのような期待と望みの忍耐を持って礼拝を捧げるべきではないかと思えます。

復活されたイエス様がトマスに現れて言われた言葉はなんですか。(27-28節)

25節で、トマスが言った通りにイエス様は言われます。まるで主がトマスのそばにいて彼が言った言葉を全部聞いていたかのように言われているのです。トマスは当然びっくりしました。復活されたイエス様は生きておられるだけではなく彼がどこで何を考え、何を話したかまですべてご存知でした。イエス様はトマスの言った言葉を一つももらすことなく指でイエス様の釘

付けられた手を触るようと言われました。(27節)

ここでみなさんに一つ質問します。トマスははたしてイエス様の言われたとおりに主の手にある傷とわきにある傷をさわったのでしょうか。それとも触れなかったと思いませんか。聖書にはトマスが実際に主を触ったのかどうかについて具体的な言及はありません。しかし、私の考えではトマスは主を直接触れなかったと思います。なぜなら、イエス様のお言葉のためです。すでに主はトマスが何を話したのか、どんな思いをもっているか、どんな状態にいるかをすでにご存知でした。これがまさにトマスの心のかべをくずして、イエス様を信じるようになり、‘私の主、私の神’と告白するようにさせたのです。復活された主は先トマスが言った言葉をそばで聞いておられたのように正確にすべてご存知でした。復活された主は私の思いをテレビの画面をご覧になるようにすべて見ておられます。私のすべてのふるまいと言葉がイエス様の前では裸のようにさらけ出されず。メッセージを聞いて見て下さい。全部自分に対する話のような気がします。ある時は、何日かまえに自分が話した言葉がすべて主の口から出る時もあります。

使徒ヨハネはトマスの告白をヨハネの福音書全体の結論として用いています。ヨハネの福音書全体の結論が“イエスは私の主、私の神”ですという告白です。その後、イエス様はトマスに何と言われますか。

“イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。”(29節)

続けて使徒ヨハネの言葉を聞いて見て下さい。

“しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によつていのちを得るためである。”(31節)

ヨハネの福音書の目的は何ですか。イエス様が神様の子であることを証しすることです。しかし、これは目で見て証しするのではなく言葉で証しすることであって、この言葉を信じるだけでもその人は永遠のいのちを得るという約束です。29節のイエス様の言葉にはトマスをしかっている意味が含まれています。“どうしてあなたはほかの弟子たちからの話を聞いてもわたしを信じなかったのか”と。

弟子たちが証したことと主が直接彼に現れて十字架の傷を見せ、触らせたことにはどんな違いがありますか。

イエス様の願われたのはトマスがほかの弟子たちの証しを聞いただけでもイエス様がよみがえられたことを信じることでした。そうしたなら、その御言葉が同じトマスに働かれ、トマスの魂を癒し、彼を生かす力の御言葉になったと思います。聖書が言っていることは何ですか。主は我々が聞いているこの神様の御言葉、聖書の証を通して我々に永遠のいのちを与えて下さるということです。我々はただ聞いているだけです。我々は主をみることも、触ることもできません。しかし、この神様の御言葉が我々を生かします。この御言葉が我々に十字架で死なれ、復活されたイエスキリストが神様の子であることを証し、我々にある罪からきよくし、我々に救いの望みを与えてくださいます。

<見ずに信じるのが幸いである理由>

イエス様は最後にトマスにこう言われました。

“イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。”(29節)

イエス様がこう言われた理由は何ですか。これからはイエス様を目で見て、イエス様の傷を触ってから信仰を持つとする者はイエス様を信じることはできません。なぜなら、イエス様の肉体はこの世のどこにもおらず、最後までだれも拝見することができないからです。ですから、我々は主から遣われた方々の通しての話を信じ、神様の御言葉を信じ、従わなければなりません。

愛するみなさん！なぜ見ないで信じるものが幸いですか。主をみないで信じる者は御言葉によって信じることであって、御霊がその人の心の中で悟らせてくださって信じることなのでもっと幸いであるわけです。一度、肉体の目で見たことより、御言葉を耳で聞いて信じる者には御霊がもっと確実な確信を与えて下さるからです。くすしい栄光と喜びもともないです。そして御言葉によって信じるということは悟りによって得られる信仰なのでその悟りでこの世を勝たせます。“あなたがたはわたしを見たから信じたのですか。!”見ずに信じる者がもっと幸いです。

2012年、復活の主日、イエス様に直接出会うことはできませんが、神様の御言葉をとおしてイエスキリストを神様として、我々を救ってくださる主として信じられる祝福が我々におとずれるようにお祈り申し上げます。復活の主が我々の人生の道にいつもわれわれとともにおられ我々の考えと思いを守ってくださって、神様の御言葉を通して信仰によって勝利していくクリスチャンプレイズチャーチのみなさんとなりますよう主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン！